

◆西野周次 選 「名句探訪」～季語との融合～

浮力あるごとし桜の小学校

小西昭夫

小西氏の『小西昭夫句集』を繙いてみた。五百句に及ぶ綺羅星のような句を通読し、小西ワールドを堪能させていただいた。

掲句は、学舎の建立の際に植樹された桜が、時を経て大樹となり、モコモコと丸ごと校舎を持ち上げていると言うのだ。おそらく鄙びた田舎の小学校であろう。桜にスポットを当てることによって、統廃合や過疎化の進む山村の光と影を浮き彫りにしている。

保育所の小悪魔たちの昼寝時

鈴鹿洋子

泣いたり笑ったり、はたまた怒ったり、好き放題に振る舞う子どもたちでござった返した喧騒が、まるで嘘のように静かになるお昼寝の時間。聞こえてくるのはスヤスヤと眠りこけている園児の寝息のみ。聞き分けの無い小悪魔たちが天使に戻るひと時である。無防備に安心しきって眠る園児の愛らしさは最たるものである。「小悪魔」という言葉が、子等への無償の愛の深さを増幅する手立てとなっている。句集『母子草』所収の一句。

滝音に目を閉ぢ滝を膨らます

大串 章

句集『恒心』所収の一句。この滝は日本三大名瀑の華厳、那智、袋田の何れかであろう。直近で見るともよし、遠望もよし。どどっと大地を揺るがすかに水の落ちる荘厳な景が見える。何もかも打ちのめすかのど迫力の瀑布だが、目を閉じると轟音が一層、体に響いてくる。滝の発するマイナスイオンを浴びながら、滝を視覚で体感しているのだ。「膨らます」が清冽な滝のイメージを増幅させる。

葱坊主空支へんと直立す

工藤泰子

藁が立った葱坊主。頭は螺髪のようにも見える。常識では空を支えるなどということは到底あり得ないが、それを大胆に誇張、擬人化して言い切ってみせた。作者の豪快な感性が楽しい。葱坊主のずらりと並んだ景が広がる。

さへづりの樹下にさへづり女学生 八木 健

囀りの音量過多を黙認す 八木 健

熊本県の民謡「おてもやん」の歌詞の一節、「ピーチクパーチク雲雀の子」を思い出した。囀りは、蛙の合唱や蝉時雨にも負けないが、女性のおしゃべりもまたしかり。虫時雨はやや控えめな感じがするが、蝉時雨はやけっぱちで風流の域を遥かに逸脱している。囀りも、蝉時雨に近いだろう。

女学生のおしゃべりは、若さの証であり、乙女の特権でもある。傍迷惑ではあるが、それを容認して微笑ましく見ている作者が見える。実に愉快的な句である。

日に勝る月の寵愛白牡丹 八染藍子

稲垣きくのという俳人に「大牡丹触れなば声を発すべし」という名句があるが、牡丹の妖艶さ、美しさは比類無い。白牡丹は、陽に映ゆるも、月に浮かぶもそれはそれは優美である。「月の寵愛」の措辞が実に効果的で牡丹の綺羅を一層際立たせている。

鬼百合や写楽のごとく見得を切る 森 敏明

豪華な花の代名詞ともいえる百合の花。鬼百合は百合の中でも女王格とは言えないが、それなりに見応えがある。自己主張が強く、負けず嫌いな人間をイメージさせる。見立てに滑稽味がある。

孤高とは群れない勇気かたつむり 西田真己

---

シリアスのただ真っ直ぐに行けと言う 西田真己

人はすぐ群れたがるものである。人との交流、拘わりの中で醸成されてこそ、人間力も身に付くというもの。人脈は至宝である。ただその一方で、摩擦や懐柔、裏切りもある。それなら毅然と孤独を貫くべしとの作者の気概が透ける。蝸牛のような遅々とした歩みも悪くない。凜と輝く一番星にも背中を押してもらっている。

コスモスや鈍感力も生きる術 二宮洋子

「鈍感力」と言えば、二〇〇七年にベストセラーとなった渡辺淳一氏のエッセイが思い出される。その本には、大事を成すには些細な事に煩わされず、他人の言動に一喜一憂せず、大局的な立ち位置を保つことが肝要だと説かれている。確かに、人生の歩みの中で、他人との微妙な距離感、処世術を身に付けることは大事である。鈍感力を説きながらも、たおやか、しなやかなコスモスの如き繊細な対処も必要であるという人生を達観した人の吟詠である。